

韓国日語教育学会 2015 年度第 28 回国際学術大会  
 (共催：韓国 OPI 研究会・協働実践研究会、後援：徳成女子大学校・日本国際  
 交流基金・時事日本語社) 報告

報告者：小浦方理恵

1.	日程	2015 年 12 月 5 日 (土)
2.	地域 (概要含む)	韓国 ソウル (徳成女子大学)
3.	担当者 (人数・役割)	講演：館岡洋子 (早稲田大学) 研究発表：金孝卿 (大阪大学)・池田玲子 (鳥取大学)、房賢嬉 (国士舘大学)・トンプソン美恵子 (早稲田大学)・小浦方理恵 (麗澤大学)
4.	形態	講演 研究発表
5.	主催	韓国日語教育学会 2015 年度 第 28 回 国際学術大会
6.	テーマ (タイトル)	日本語教授法における新しい試み
7.	内容の概要	◆講演 (館岡洋子)「日本語授業における協働の学びの場のデザインーなぜ協働するのかー」 ◆研究発表： 《協働実践研究会日本支部メンバーによる研究発表》 ・「ビジネスコミュニケーションのためのケース学習の授業デザイン」金孝卿 (大阪大学)・池田玲子 (鳥取大学)・近藤彩 (麗澤大学) ・「日本語教師による協働学習に対する期待と不安ー韓国と台湾の比較分析ー」房賢嬉 (国士舘大学)・トンプソン美恵子 (早稲田大学)・小浦方理恵 (麗澤大学)・池田玲子 (鳥取大学)
8.	参加者 (人数・背景・声など)	約 200 名 日本語教育関係者・協働実践研究会会員
9.	担当者の内省	韓国では、2010 年に協働実践研究会韓国支部が設立され、現在では、金志宣さん (梨花女子大学)、倉持香さん (弘益大学) を中心に協働実践をテーマとした研究会が行われています。また、2013 年の韓国日語教育学会 第 24 回国際学術大会では、池田によるピア・ラーニングについての講演、そして、池田・トンプソン・房によるワークショップが実施されました。 第 28 回目となる今回の韓国日語教育学会国際学術大会でも、「日本語教授法における新しい試み」を主題とし、館岡による協働学習についての招聘講演が行われました。講演の他にも、協働実践研究会運営メンバーや研究会会員による協働をテ

テーマとした研究発表が数多く行われ、韓国の日本語教育で、新たな試みの一つとして、「協働」が注目されていることが窺えました。今回は、日本から上記の 6 名のメンバーが参加し、講演、研究発表を行いました。

<< 招聘講演 >>

講演の概要は以下のようなものでした。初めに、近年「教えること」から「場づくり」へという教育のパラダイム転換が起きていること、それに伴い、期待される教師の役割も変化していることなど、日本語教育の現状についての説明がありました。次に、ピア・ラーニングの考え方、理論の説明があり、それから、ピア・ラーニングによる協働の学びの場はどのようなものであるかのお話がありました。そして、協働の学びの場の具体例として、自身の実践から 2 つの事例の紹介がありました。2 つの事例の紹介とその検討を通して、どのようなプロセスを経て、どのような学びがあったのかを実践事例と共に知ることができ、新たな学びや新たなものを生み出すことができる協働の大きな可能性を感じました。

今回の学会では、26 の研究発表が行われましたが、そのうちの 7 つが協働と関連のあるものでした。そのため、会場となった 6 つの教室のうち、1 つの発表会場で行われたすべての発表が、協働をテーマとしたものでした。下に、協働をテーマとした研究の題目とその概要を記します。

<< 研究発表 >>


- ・「ビジネスコミュニケーションのためのケース学習の授業デザイン」金孝卿（大阪大学）・池田玲子（鳥取大学）・近藤彩（麗澤大学）

概要：グローバル化が進む現在、ビジネス日本語教育現場で起きている課題を指摘し、その課題を解決するための具体的な教育方法として、ケース学習による授業を提案した。

- ・「内省活性化に向けた内省シェアリングの試みーピア・ラーニングを取り入れた日本語授業において」金志宣（梨花女子大学）

概要：ピア・ラーニングを取り入れた日本語授業を行った上で、その内省内容を学習者同士で共有（内省シェアリ

		<p>ング) することによる内省活性化の可能性を探った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「日本語教師による協働学習に対する期待と不安—韓国と台湾の比較分析—」 房賢嬉 (国士舘大学)・トンプソン美恵子 (早稲田大学)・小浦方理恵 (麗澤大学)・池田玲子 (鳥取大学)</li> </ul> <p>概要: 2013年に韓国の日本語教師を対象に行った協働学習に対する期待と不安についての調査を分析した。その結果を台湾の結果と比較することで、韓国における特徴を明らかにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「グループワークを取り入れた『日本語会話』の実践」 辛銀眞 (明知大学)</li> </ul> <p>概要: グループ・ワークを取り入れた「教養日本語」科目の実践を、学習者の授業活動満足度調査を通して振り返った。その結果、学習者はグループ・ワークには高い満足度を示していたが、学習者の希望と教師の理想は必ずしも一致しないことが明らかになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「大学講師の日本語学習に対する意識—韓国の教養日本語科目におけるグループワークに焦点を置いて—」 倉持香 (弘益大学)・奈呉真理 (慶熙大学)・関陽子 (韓陽大学)</li> </ul> <p>概要: 韓国の大学の日本語教師を対象に行った日本語学習やグループワークに関する意識を明らかにするため、質問紙調査を行った。その結果、教師の抱く学習者観が授業のあり方に影響を与えていることが分かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「オンライン授業における協働学習の試み」 工藤恵利子 (放送大学)</li> </ul> <p>概要: 学習者の持つ知識や意見をオンライン上でやりとりする際、学習者同士がコメントし、改善する活動を行った。分析の結果、学習者は互いに活動の中で得た知識や他者からの意見を生かして訂正し、改善することができることが明らかになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「自己 PR 文推敲にみる『協働的自己分析』の意義—韓国の大学生を対象とした就職活動支援実践から—」 古賀万紀子 (早稲田大学大学院)</li> </ul> <p>概要: 韓国の大学生を対象とした就職活動支援実践をインタビューから分析し、本実践が協働的に自己 PR 文の創作に関わっていく関係性を生み出していたことが明らかになった。</p>
--	--	--

		<p>また、翌日の12月6日（日）には協働実践研究会韓国支部メンバーと合同会議を行いました。会議の出席者は14名で、日本からは、池田、舘岡、金、房、トンプソン、小浦方の6名が出席し、現況報告や、今後の協働実践研究会の活動について、意見を交わすことができました。韓国支部からは研究会を定期的に行うことが難しいという課題に対し、北京支部や台湾支部の例を交えながら、いくつかの提案がなされました。このような対面で意見を交わす場が、協働実践を共通のテーマとした韓国と日本の実践者間、そして、海外支部同士の間をより強め、今後の実践研究会の基盤を形成していくと考えます。</p>
10.	次回への課題	<p>今回の学会での招聘講演や研究発表の数からも、韓国における協働学習、ピア・ラーニングへの関心の高さが窺えます。今後も、協働実践研究会韓国支部を中心に、韓国ではますます「協働」や「ピア・ラーニング」をキーワードとした実践、そして研究が増えていくのではないかと感じました。韓国支部と共に、互いに成長を支え合えるような活動を考えていきたいと思えます。</p>
	会場での様子	<p>&lt;招聘講演&gt;</p> 



<フロアの様子>





<研究発表>

